

グローバル化のなかの語学教育（その2） —小学校低・中学年における導入期の外国語教育—

Study of Globalization and Language Education II —A Case of English Language Class at the Elementary School Attached to Nara Women's University—

キャンベル 久美子
CAMPBELL Kumiko

グローバル社会の進展とともに、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と、それに伴って外国語教育の重要性が声高、かつ急進的に叫ばれている。現実の諸問題を前にしての外国語教育改革に語学教育の重要性を認識する者でさえ危惧するところを含んでいる。真に大切な外国語を学ぶ意味が置き去りにされ、スキルとしての外国語がただ物をいう時代^{注1)}が到来しかねない勢いである。

学習者を学びの中心におく語学教育の方法を見失わないためにも、子どもたちが、活動のなかで一つの学びを意味づけ、それまでの全体の理解のなかに関連づける過程において、ひとつの言葉で意味されているものを、交差し合う他の言葉から際立たせるなどを通して、言語感覚をたえず鋭くすることによって、着実にことばの世界を明確にしていける学びを構築する。本稿では、そのような意図をもって、出発点にある外国語活動の実践を振り返る。

キーワード：ことばの教育、文化、外国語活動、コミュニケーション、欧州共通参照枠
Key Words：Language Education, Culture, English Language Activities, Communication, Common European Framework of Reference for Language, CEFR

1. はじめに

1980年代以降、日本の英語教育は、「コミュニケーション」重視の英語教育が展開されている。かつて「英語教育は実用主義か教養主義か」という議論が盛んに行き交い、会話中心の英語へ舵取りしたにも関わらず、話せないと同時に読み書きもできないという現状を招く。「英語が使える日本人育成のための行動計画」(2003)が組まれた経緯などを経て、2013年4月に、自民党教育再生実行本部「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」¹⁾の「英語教育の抜本的改革」において、尺度としてのTOEFL等、実用的英語能力の数値化あるいはそれに類するものの導入等々の提案が取りまとめられた。

続いて同年10月、文科省の5年生からの正式教科化の方針が公表され、続く12月には文部科学省による、初等中等段階におけるグローバル化に対応する環境作りを進めるために、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」²⁾(付図1)が公示された。この計画は2020年に向けての英語教育ビジョンを示すもので、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、2014年度から逐次推進するとある。

この文科省の実施計画案は、即下に直面する課題や問題を含みながらも、日本の英語教育における新たな段階を意味するであろうし、グローバル社会の「話せる外国語」の目標を掲げ、一般にも見える形で前進し始めたといえる。「小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実し、生徒の英語力向上(高校卒業段階で英検2級～準1級、TOEFL, iBT57点以上等)」と、「小・中・高の各段階を通じた」一貫性をもたせるという重要な課題を整理している。外部試験の検証も含めて、2018年の先行実施としての学習指導要領の改訂、2020年の完全実施を目指している。

この外部試験による検証という方策は、試験規格の英語や英語試験産業といった世間が浮き足立つ要素を含むだけに、能力主義だけが極端にひとり歩きしないともかぎらないと考える。

以上のような状況にあつて、外国語教育のはじまりである小学校の外国語活動について、その授業実践を記述しておくことは、何がしかの役にたつのではなからうかと考えた。また、筆者の今後へ向けての提言として、複言語主義(plurilingualism)、複文化主義(pluriculturalism)を理念とするCEFR^{注2)}の理解と活用がある。CEFRの受容とその利用は、最近の日本の英語関連のものでは、CEFRに準拠しつつ、日本の教育環境における英語に関する枠組みに考慮した英語到達度指標CEFR-J^{注3)}(2012年3月)がある。CEFRの活用が押し進められるなかにあつて、CEFRの背景にある個の尊重、自律学習つまり「学習者のためのもの」という立脚点よりも、「利便性としての評価基準指標の機能についての関心の方が高くなっている」³⁾というCEFR-J構築の2008-2011年度研究代表者である投野由起夫の指摘には示唆されるものがある。

本稿は、CEFRの理念である複言語・複文化能力(pluricultural competence)^{注4)}が将来に開かれていく可能性を小学校段階から如何に培い、また、言語感覚と言語知識の両輪のうえに実際の活動を楽しみ、コミュニケーション能力の素地を如何に培っていくかを考える一考としたい。

2. 小学校英語の概要

『小学校学習指導要領』(平成20年3月告示)の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」⁴⁾と設定された。また、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(2008)は、外国語活動の3つの柱を立て、「1) 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。3) 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れしませる」⁵⁾、これらを踏まえた活動を統合的に体験することによって、コミュニケーションの素地が養われるとしている。

現在、小学校の外国語活動は教科としての位置づけではなく領域扱いであるため、数値による成績評価も必要としない^{注5)}。授業時数については、第5、第6学年に各々週1コマ、年間35時間が当てられている。

このようにある枠組に対して、前述のように「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013年12月13日告示)において、改革の具体的方策が示された。この方策では授業時数における大幅な増加や、2013年度より高校の英語授業を英語で行うことが実施されたのと同様に中学校においても英語による授業を原則にすることが提案されている。また、モジュール授業^{注6)}の活用が新たに挙げられている。なお、モジュール(15分)では毎日の反復、定着活動を行い、言語熟達度を向上させる。

以上のように改革案では、外国語活動の時間と空間の確保が明確化され、現場である学校は今後この実施計画案に沿った変革が進められる状況にある。次に実践校での英語教育を見ていくにあたり、附属小学校の英語教育の流れに簡単に触れておく。

3. 実践校での英語教育の流れと特質

奈良女子大学附属小学校(以下、附属小学校)では1998年より英語授業が開始され、1999年度に、第5、第6学年で週1コマ、2003年度に第4学年、2006年に第2学年から開始となった。現在は2011年度からの「新学習指導要領」の全面実施、必修化の上での第5、第6学年で各年間35単位時間の「外国語活動」が、第2学年から第4学年は週1コマ、「国際」の名称での英語学習が確保されている。そのうち筆者(非常勤講師)は第2、第3学年と第5、第6学年を担当し、第4学年は附属中等教育学校英語教員が担当している。

なお、附属小学校の学習方法については、附属小学校の伝統であり特色である「奈良の学習法」^{注7)}、自律学習という形態が取られ、ことばの教育^{注8)}の関連でいえば、自己表現を重視した教育が行われ、重要な基礎基盤力を育てている。

次に CEFR と CEFR-J 及び両者の関係について、述べる。

4. CEFR と CEFR-J

CEFR (外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠) は、言語的な規定を設けず、英語以外の言語でも適応できるように作られている。2 言語、あるいは 3 言語習得が想定され、言語使用者が社会的な存在として持つべき言語能力育成のための包括的で「一貫性」^{注9)}のある共通参照枠を提供したものである。

CEFR の共通参照レベル (The Common Reference Levels) は、理解することとして 1) 聞くこと、2) 読むこと、話すこととしての 3) やりとりと 4) 表現、5) 書くことの 5 技能に分類されている。特徴として、話すことは、相互あるいは一方向コミュニケーションという観点から ① やりとり (Spoken Interaction) と、② 発表 (Spoken Production) という 2 つの categories に分類されている。① の学習は受容的活動を学習し、中核的役割を果たす。

今回は、CEFR の日本語版である CEFR-J、すなわち、CEFR に準拠しつつ、日本の教育環境に特化された CEFR-J 日本語版 (Version 1.1) を参照する (表 2)。この CEFR-J の特徴で CEFR にはない A 1 レベルの前段階として、Pre-A 1 が独自に設置されている。これは CEFR においても、「基礎 (A 1 レベル)」以前の段階が存在するとの明記⁶⁾があるように、小学校における英語教育 (外国語活動) を考慮したものである。また、中学校の外国語科教育 (A 1) への円滑な接続を行うための段階である。CEFR と CEFR-J のレベル対照表を (表 1) に示す。

次に Pre-A 1 レベルの 5 技能について、英語到達指標 CEFR-J ガイドブック³⁾に従って概説する。

Pre-A 1 における 5 技能は、以下のように想定されている。

- 「聞くこと」では、初めて英語にふれる学習者のために、指導者が “Teacher talk” を使用して、日常生活に馴染みのある簡単な語彙をゆっくり話す時に、学習者はそれを理解すること、また、アルファベットの音声を聞いて、学習者がその文字を認識できること。
- 「読むこと」では、絵本の読み聞かせ等を通じて、学習者が語彙や表現を十分に慣れ親しんだ後、それらについて、文字を絵本から見つけ、文字を認識して読むことができるようにすること、また、ブロック体で書かれた大文字、小文字を認識できること。
- 「やりとり」では、学習者が、簡単な定型表現や chunk (チャンク：意味のあるかたまり) や基礎的な語句を使用して、自分の思いや欲求を相手に伝えたりすることや、言語の補助としてジェスチャーを使って、相手とコミュニケーションを図ることができること。
- 「発表」では、学習者が簡単な語彙や基本的な表現を用いて、自己紹介 (名前や年齢など) ができることや、前もって話すことを準備した上で、基本的な語句や、定型表現を用いて、友だちの前で Show & Tell (絵や実物を提示してそれについて話す) ができること。
- 「書くこと」では、アルファベットの大文字・小文字、簡単な語彙をブロック体で書くことができる、また、簡単な綴りを 1 文字ずつ聞いてその文字を書くことや、文字を見て書き写すことができること。

表 1 CEFR と CEFR-J のレベル対照表³⁾

CEFR	CEFR-J
	Pre-A1
A 1	A1.1
	A1.2
	A1.3
A 2	A2.1
	A2.2
B 1	B1.1
	B1.2
B 2	B2.1
	B2.2
C 1	C1.1
C 2	C1.2

表2 CEFR-J 日本語版 (Version 1.1) の一部³⁾

レベル	話すこと	
	やりとり	
Pre-A1	基礎的な語句を使って、「助けて!」や「～が欲しい」などの自分の要素を伝えることができる。また、必要があれば、欲しいものを指さしながら自分の意思を伝えることができる。	一般的な定型の日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に応答したりすることができる。
A1.1	なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。	家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、(必ずしも正確ではないが)なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。
A1.2	基本的な語や言い回しを使って日常のやりとり(何ができないかや色についてのやりとりなど)、において単純に回答することができる。	スポーツや食べ物などの好き嫌いなどのとてもなじみのあるトピックに関して、はっきり話されれば、限られたレパートリーを使って、簡単な意見交換をすることができる。
A1.3	趣味、部活動などのなじみのあるトピックに関して、はっきりと話されれば、簡単な質疑応答をすることができる。	基本的な語や言い回しを使って、人を誘ったり、誘いを受けたり、断ったりすることができる。
A2.1	順序を表す表現である first, then, next などのつなぎ言葉や「右に曲がって」や「まっすぐ行って」などの基本的な表現を使って、簡単な道案内をすることができる。	補助となる絵やものを用いて、基本的な情報を伝え、また、簡単な意見交換をすることができる。
A2.2	簡単な英語で、意見や気持ちをやりとりしたり、賛成や反対などの自分の意見を伝えたり、物や人を較べたりすることができる。	予測できる日常的な状況(郵便局・駅・店など)ならば、さまざまな語や表現を用いてやり取りができる。
B1.1	身近なトピック(学校・趣味・将来の希望)について、簡単な英語を幅広く使って意見を表明し、情報を交換することができる。	個人的に関心のある具体的なトピックについて、簡単な英語を多様に用いて、社交的な会話を続けることができる。
B1.2	病院や市役所といった場所において、詳細にまた自信を持って、問題を説明することができる。関連する詳細な情報を提供して、その結果として正しい処置を受けることができる。	駅や店などの一般的な場所で、間違った切符の購入などといったサービスに関する誤りなどの問題を、自信を持って詳しく説明することができる。相手が協力的であれば、丁寧に依頼したり、お礼を言って、正しいモノやサービスを受けることができる。
B2.1	ある程度なじみのあるトピックならば、新聞・インターネットで読んだり、テレビで見たニュースの要点について議論することができる。	母語話者同士の議論に加われないこともあるが、自分が学んだトピックや自分の興味や経験の範囲内のトピックなら、抽象的なトピックであっても議論できる。
B2.2	一般的な分野から、文化、学術などの、専門的な分野まで、幅広いトピックの会話に積極的に参加し、自分の考えを正確かつ流暢に表現することができる。	幅広い慣用表現を使って、雑誌記事に対して意見を交換することができる。
C1.1	言葉をこたさら探さずに流暢に自然に自己表現ができる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、意のままに効果的にできる。自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を他の話し手の発言にうまくあわせることができる。	
C1.2	いかなる会話や議論でも無理なくこなすことができ、慣用表現、口語体表現をよく知っている。自分を流暢に表現し、細かい意味のニュアンスを正確に伝えることができる。表現上の困難に出会っても、周りの人に気づかれないように修正し、うまく繕うことができる。	

このPre-A1に続くA1レベルは小学校から中学校への接続部分から中学校英語教育の初期段階が想定され、したがって、小学校の第5、6学年が相当すると考えられる。A1レベル5技能の説明は略すが、全体的に捉えれば、A1レベルでは英語に親しむ段階を進展させ、基礎的な語彙や表現を利用して、日常的な話題、学習者自身や家族の個人的な情報、興味関心の高い事項について、「聞くこと・読むこと・スピーチ・やり取り・書くこと」ができる。そして、初級レベルの学習者であることを認識して、「ゆっくり、はっきりと話してくれれば」理解することができる。また「手助けをしてくれれば、簡単な会話ができること」が特徴としてあげられる。

以上がCEFR-JのPre-A1とA1レベルの(CAN-DOの)特徴であるが、CEFRのself-assessment grid(全体のレベル評価枠)の形式ですべてのレベルである12レベル、5技能のディスクリプタがガイドブックの付属CD-ROMに収録されている(表2)。なお、参考のためにCEFR-J Can do Descriptor Databaseのサンプルを(付表2)に挙げておく。

5. 2013年度の授業実践を例として

本稿では、筆者の小学校の外国語活動授業の実践校の授業実践の内容とその過程で考えたことを記した。CEFRのねらいとその方針に合致するかどうかの詳細な検討は今後の課題としたい。

実践を見ていく前に、ここでは再度、「学習指導要領」の目標を、CEFRもしくはCEFR-Jレベルとの関係性のなかで捉え直しておきたい。2011年より導入の小学校外国語活動の目

標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」⁴⁾ ことである。「コミュニケーションの素地」という規定に従うならば、CEFR-J レベルの Pre-A 1 がそれにあたり、また、中学校の外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の基礎を養う」レベルへの円滑な接続につながる段階 A 1 への過程が、小学校の外国語活動となろう。

5-1 授業実践例

今回は第2学年に焦点を合わせて述べる。

自己表現活動としての皆の前で話す自己紹介や、ゲストや友だちとの挨拶のやりとりはみな競って、その発表者になりたがる。素直に表現することそのものを楽しむことができる時期である。

語彙および文の導入の順序は、定型表現としての文（いくつかの単語からなり、ひとまとまりに学習されるもの）例えば、挨拶、Good Morning, Nice to meet you. 等 単語は身近で親しみやすいもの、色、数字、くだもの、動物、等から入り、その間、適宜、歌やゲームを取り入れた。

語彙群としては、事物に関するもの12個程度から、既に知っているカタカナ語を含む場合は20個弱を提示する。例えば、同類の語の階層から、生活に身近なもの（英語圏のことばの本；それ故、外国の子どもの身近なことばとの違いがある）、反対の関係性を持つ語、反意語 (opposite) 等。このようにひとつひとつの纏まりを、関係性の中で分類しながら提示することにより、語のもつイメージ、カテゴリーへの意識にゆっくり繋げて「自覚化」^{注10)}を意図する。岡本氏が『子どもことば』⁷⁾で述べるように、弁別性をもって言葉を定着させることで、知的追求は飛躍的に増大させうる。

この時期の児童は、母語においても語彙の豊かさが格段に膨らむ時期で、また、聞いた英語音をかなり正確に再現でき、声に出すことそれ自体を楽しむことができる。そこでは知らず知らずのうちに音の異なりを体感している。

また、理解語彙、使用語彙を増やす重要な時期でもある。それ故、身近なカタカナ語を利用して英語に繋ぎ、語彙の蓄積を重ねる段階と考えられる。したがって、提示語彙は量的に多くを挙げても、授業時間内に全部覚えるということにせず、逆に分からないという状況から“What’s this?” “What?” “This one?” と教師や友だちに尋ねる自然な英語を使う環境 English Space を作っていく。配布物を渡すときに“How many?” “Six, please.” “Here you are.” “Thank you.” のように毎時繰り返す等々、を重ね、順次、場面に従って、教室英語、活動時の自然な発話場面を増やし英語空間を広げて言語環境を更新する。

さらにこの段階ではできるだけ多くの語彙情報を提示する。語彙の全てを知らなくてもストーリーを充分楽しめるこの時期は、本の読み聞かせを通して、多くのまとまった英語を聞かせられる。聞くことの活動、類推、創造性の観点を含み重要かつ貴重な時期である。

次にそもそも発話は声により、声でコミュニケーションし、その身体性をもって体感を重ねる。それ故、以下のような試みがある。

5-2 指導例「聞くこと」「読むこと」そして「書くこと」への導入、あるいは音声言語としての捉え：アルファベット体操

本年度は音素への気づき、フォニックス（発音と綴りの関係）とともに読むことと書くことの入門を考慮したテキスト *Think read write 1*⁸⁾ を活用して、アルファベット体操（3学年はアルファベットエクササイズと呼んでいる。）と呼んで、CDの音声にしたがって、聞いた単語を体全身で表現するチャンツ (chant) を取り入れた (図1)。この音声資料はテンポがよく、使われている語も名詞、動詞、形容詞、そして前置詞がカバーされている。これは低学年でかなり英語らしい発音をしていた児童が、表現の複雑さが増すと英語らしい発音から再び日本語的な発音に戻る状況を生む。それ故、音を意識化することから始めて無意識化へ、そして習慣化へという流れを作る。English mouth（発声器官の働き・調音の仕方）のより確実な定着と English ear（英語らしさを聞き取る耳）を重視し、その

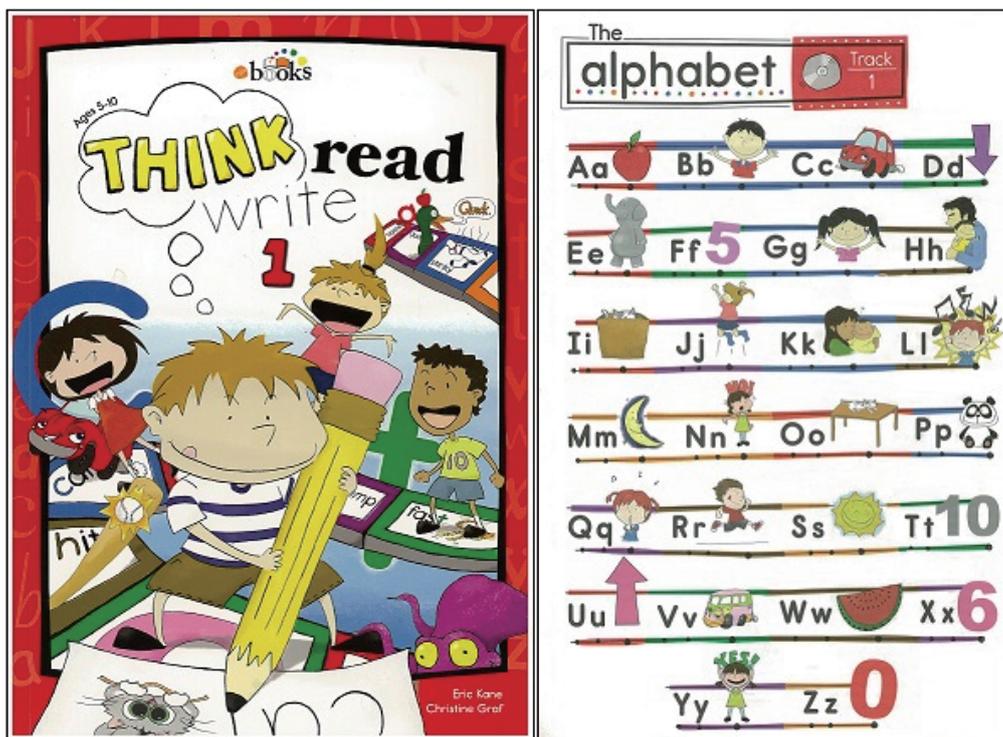


図1 アルファベット体操（アルファベットエクササイズ）⁸⁾

確立を狙う。音声的な気づきを体に浸透させ、Pre-A 1 レベルにおける5技能を蓄えることを意図している。

さらに、特に小学校段階では、言葉遊びの側面を含んだ「教育課題」リスト⁶⁾を作成することもできるであろう。その場合、例えば字形に関わってのものや、身の回りの生活空間に数多くあり、自然に視覚に飛び込んでくるカタカナ語の利用も有効と考えられる。

5-3 指導例：授業での試み

(1) 書くことに繋がる指導／字形クイズ（その1）

クイズと銘打って、書くこととして、字形への気づき、関心を引き出した。但し、字を書き写すことは要求するものではなく、イラストで示されたワード(egg, up, cup, pig, kick)を見つけるもので、ヒントとして字形を色によって示した。

(2) 書くことと読むことに繋がる指導／字形クイズ（その2）

先の時間にクリスマス語彙を覚えた。次にクイズと銘打って、クリスマス語彙リスト⁹⁾（表3）から知っている単語を見つけるという言葉遊びとして提示した。この学年では同じ字形を見つけるという活動として行ったが、高学年では同様のリストを使って、guessing game と銘打って、読みを想像して単語を探すという形で提示した。単語数は200語で、活動は協働学習を目的にグループ単位とした。大いに楽しめた活動であった。

このようにこの時期の児童はことばの習得の上でも大きな関心と興味を示し、クリスマスリストについては時期を過ぎても、授業後にリストをもって尋ねにくる。文化行事のもつ魅力がずっと子どもの心を惹きつけるのであろうが、もう一つ、この時期の児童のもつ旺盛な言語への期待と関心が授業を自ずと生き生きした活動へ導いたといえよう。子どもたちは言葉を知ることが「よろこび」なのである。

別の例を引こう。今回の素材は、デンマークのナーサリライム (nursery rhymes) からの押韻詩で、N.M. Bodecker の絵本 *Danish Nursery Rhymes It's Raining Said John Twainig*¹⁰⁾ (1973) から取り出した^{注11)}。この絵本は、作者によるイラストもひょうきんでかわいく表情がある絵になっていて、子どものわらべ歌、童謡であるナーサリライムは、詩行が韻を踏み、短く、かつ音としての響き^{注12)}と心地よい^{注13)}リズムをもつため子どもの心は捉えられた。

表3 クリスマス語彙リスト⁹⁾

Christmas (Secular) Vocabulary Word List				
<p>A</p> <p>angel artificial tree</p> <p>B</p> <p>bells birth blizzard blustery boots bough bow box</p> <p>C</p> <p>candle candy candy cane cap card carolers caroling carols celebrate celebration ceremony charity chestnuts chill chilly chimney Christmas Christmas card Christmas carol Christmas Eve Christmastide Christmas tree Christmas tree stand cider coal cold cookie creche</p> <p>D</p> <p>25-Dec decorate decorations display</p>	<p>E</p> <p>eggnog elf elves eve evergreen exchange</p> <p>F</p> <p>family family reunion Father Christmas feast Feliz Navidad festival festive fir fireplace firewood frankincense frosty Frosty the Snowman fruitcake</p> <p>G</p> <p>garland gift gift-giving gingerbread gingerbread house gingerbread man gingerbread woman give gold goodwill goose green greetings guest</p> <p>H</p> <p>happy holiday holly hope hot chocolate hot cider hug</p>	<p>I</p> <p>ice skates icicle icy ivy</p> <p>J</p> <p>Jack Frost Jesus jingle bells jolly joy joyful Joyeux Noel</p> <p>K</p> <p>kings Krampus Kris Kringle</p> <p>L</p> <p>lights list log love</p> <p>M</p> <p>manger merry Merry Christmas mince pie mistletoe mittens myrrh</p> <p>N</p> <p>nativity naughty nice nippy Noel North Pole nutcracker</p> <p>O</p> <p>occasion ornaments</p>	<p>P</p> <p>package pageant parade partridge party pie pine tree pinecone plum pudding poinsettia popcorn string presents</p> <p>R</p> <p>receive red reindeer rejoice reunion ribbon ritual Rudolph</p> <p>S</p> <p>Saint Nicholas sales Santa Claus Santa's elves Santa's helpers Santa's list Santa's workshop scarf Scrooge season season's greetings shopping skate sled sleigh sleigh bells snow snowball snowbound snowfall snowflake</p>	<p>S cont.</p> <p>snowman snowy socks spirit star St. Nick stocking stocking stuffer sugarplum sweater</p> <p>T</p> <p>tidings tinsel toboggan togetherness toy tradition tree trimming trips turkey</p> <p>U</p> <p>unwrap</p> <p>V</p> <p>vacation visit</p> <p>W</p> <p>wassail winter wintertime wintry wise men wish wonder workshop wrap wrapping paper wreath</p> <p>X</p> <p>Xmas</p> <p>Y</p> <p>yule yule log</p>

はじめは単語“rose, ring, turnip”の3語から始めて, “One brought a rose;” “one brought a ring” “one brought a turnip” 文へ, そして “to give to the King” へと繋ぐ. ここでは表現が音の纏まりとして捉えられている.

この二つの活動からいえることは, 包括的には共に文化という「共通の財産」を背景としての外国語活動から, 文化が体験的に理解されていることである. 押韻詩の活動では, 初めてアルファベットを書き写してもいいと指示した学習記録 (ELP)^{注14) 11)} となる子どもたちへの資料 (図2) には, 例えば, 同じ文字の色分けや線で囲んだ分類が独自に試みられていた. 言語的・音声的な気づきが蓄積され, また, 体験的に音声に慣れ親しむことが成立している. このように学習指導要領における目標を満たし, 且つ, Pre-A 1の「読むこと」に属する文字の認識に向かう過程と捉えることができる.

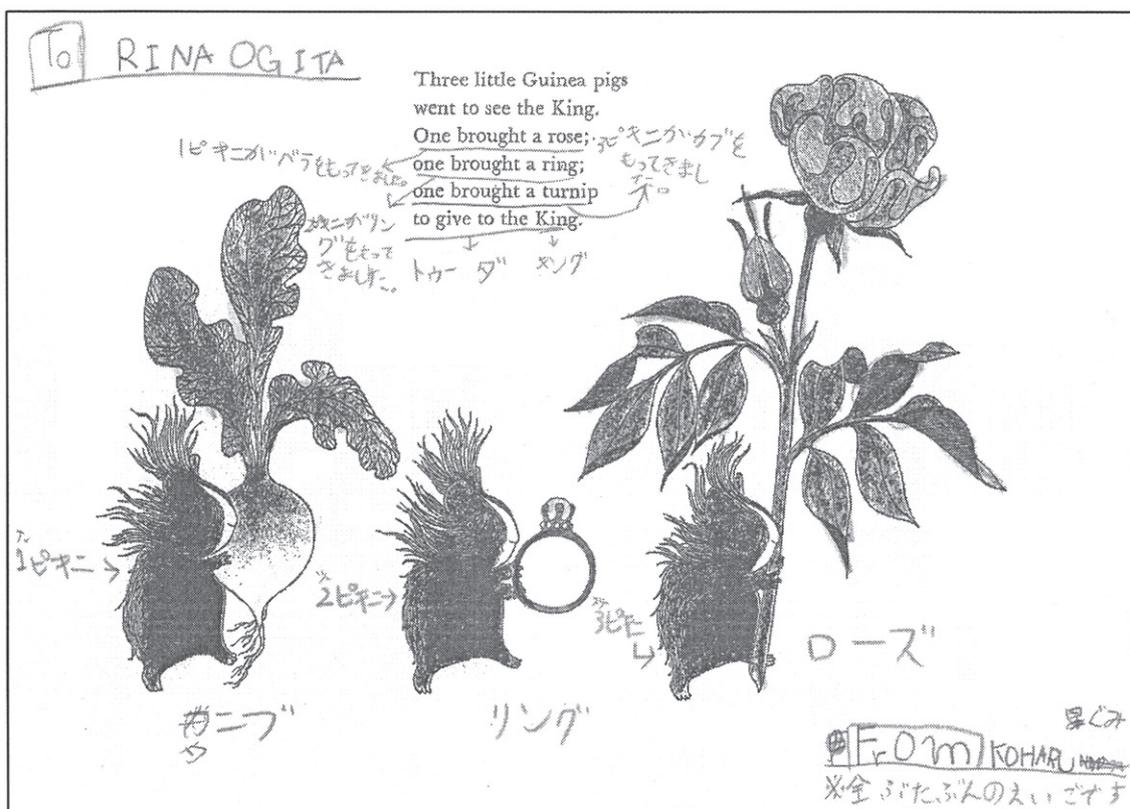


図2 *It's Raining Said John Twain*¹⁰⁾ を活用した友だちへのカード ELP

なお、スパイラル学習¹⁵⁾により同じ教材で無理のない学びの形成を図っている。例えば、絵本 *The Very Hungry Caterpillar*¹⁷⁾ は、3年生のスキットから4年生の全体劇へ、*Merry Christmas, Blue Kangaroo!*¹⁸⁾ は、初年時教師の読み、次年時 CD 読みで、“Teacher talk”から英語母語話者速度へ、として取りあげる等々、である。なお、低・中・高に亘って活用した貴重な絵本資料に、オックスフォード大学所蔵書籍 *The Opie Collection The World of Mother Goose* の復刻版 (Facsimile edition)¹⁸⁾ がある。

6. 生きたことばを創っていく、新しい英語教育への指針にむけて

生活文化という場面の中ででてくるところの場面と場面の連続は、カルチャーと結びついて、ことばの学習と文化の統合として、生きたことばの世界を創るものとなると考えられる。

- ・ 絵本も必然的に文化と結びついている。それを教材として選択する際、教師の中で意識化していること。
- ・ 絵本の多くは動作に結びついている。音によって文化の違いが体現され、文化現象であるということは身体的心身現象である。
- ・ CEFR, 大きな器, 枠を通して、言語を見る
- ・ 教材によっては文化的価値に跡付けされている物を使っていくことの効果
- ・ 生活行動に関わってくること、あそびであろうとなかろうと、食事、1日のことからの運び、すべて身体性をもち、身近ということに繋がる。
- ・ すべて身体的で心を含めて、歌、あいさつ、生活そのもの、食事も生活言語である。

筆者が実践を通して、感じたことを抽象的にまとめれば、①言語に文化を通して触れる、文化に言語を通して触れる。②言語は身体的な活動であり、身体は言語的な活動である。③言葉を音のかたまりとして捉えうることが音声言語なるものの性格の要をなすということである。

7. おわりにかえて

音声、音声言語の中から、自らかたまりを会得しているということは、生きたやりとりができることに繋がる。つまり、自分だけが生成するのではなく、文化背景をもたなければインターアクションではない。また、子どものことばには気持ちがあり、夢中になって言葉あそびをするなかで、複言語・複文化能力(pluricultural competence)を自ら学習して、常に言語感覚を磨く過程がある。

そもそも奈良女子大学附属小学校児童は自己を表現することの楽しさ、喜びを知っている^{注19)}。また、特色ある教育法は母語による言語表現能力に大きな効果をもたらす^{注20)}。このような好条件の整った中での外国語活動の授業実践であった。このことは今後、子どもの言語教育全般との関係で捉える際の重要な証左となろう。

ふたたび複言語・複文化主義に立ち戻れば、常に外国語教育というものは、多面的かつ輻輳的集積から「全ての言語能力がその中で何らかの役割を果たすことができるような言語空間を作り出す」¹⁹⁾ 創造活動であると考え、「コミュニケーションの素地」が意味するところの含意は深い。

なお、中学年についても詳述したいのであるが、紙幅の関係で以上とする。

注釈

注1) 岡本夏木は「ことばと人間形成」²⁰⁾の中で、ことばを個人と社会をつなぐものとして、その発達段階から一次的言語と二次言語について述べている。最初に現れる対話的状况による一次的ことば行動のなかにこそ、自他関係の基礎が形成され、また、そのなかで、現実生活の中へより確かに根をおろしてゆき、その上にこそ、真に充実した二次的ことばの形成が可能になるという。現代社会情勢としての二次言語への過度の期待は、単なる二次言語の形式だけが肥大した人間を生む、と警告する。コミュニケーションの素地を養うものとして、一次言語、二次言語を母語と外国語という関係に置き換えても同様の形式だけが肥大化していくといえよう。

注2) CEFRとは、「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 *Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment*」で、欧州評議会(Council of Europe)によって、2001年に公式に発表されたガイドラインである。1971年来の成果としてCEFRは、『言語に関するヨーロッパ共通参照枠: 学習、教授、評価』⁶⁾として日本で訳出されている。このCEFRは、ヨーロッパにおいて、言語教育のシラバス、カリキュラム、教科書、試験の向上のために一般的基盤を与えることを目的として、対象領域、内容、方法を明示的に示すものである。また、言語達成度の具体的な基準を提示することにより、資格の国際比較や相互認定を容易にし、ヨーロッパ内での人の動きを容易にすること、文化間の相互理解とコミュニケーションを促進することなどを意義としており、新しい言語観として複言語主義(pluralism)の立場をとっている。引用文献7に詳しい。

注3) CEFR-Jは欧州評議会が開発されたCEFRに準拠し、それを日本の英語教育の枠組に適用したものである。2011年6月の「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の中で、生徒に求められる英語力達成のための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することという提言とつながるもので、文部科学省初等中等教育局が『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形で学習到達度目標設定のための手引き』¹³⁾(2013年3月)を公表した。小学校段階は含まれないがこれにより能力記述文による到達目標が示され、国レベルでの一貫性の構築が目指されている。

注4) 複言語・複文化能力(pluricultural competence)とは、コミュニケーションのために複数の言語を用いて異文化間の交流に参加できる能力をいい、一人一人が社会的存在として複数の言語に、全く同じようには言わないまでも、習熟し、複数の文化での経験を有する状態をいう⁶⁾。「人間は自分の内から言葉をつむぎ出すその同じ働きによって、

自分自身を言葉のなかへとつむぎ込む。それぞれの言葉は、それが属する民族のまわり
にひとつの輪を描いていて、その輪からでることはただ別の輪のなかに移り入る限り
において可能なだけである。従って外国語の習得は、いままでの世界の見方に新たな見地
を獲得すること¹⁴⁾で、交流を有意味な対話、新たな創造に結びつける必要要件である。

注5)すでに平成23年に文部科学省国立教育政策研究所の教育過程研究センターにおいて、
『小学校外国語活動における評価方法の工夫改善のための参考資料』が刊行され、この
中では平成22年の文部科学省初等中等教育局長通知における、観点別学習状況評価の観
点とその趣旨が示されている。その観点とは①コミュニケーションへの関心・意欲・態
度、②外国語への慣れ親しみ、③言語や文化に関する気づき、となっている。

注6) 文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育会実施計画」²⁾ 掲載の「小学校5・
6年生におけるモジュール授業を用いた時間割の例(イメージ)」

	月	火	水	木	金
モジュール	※	※	※	※	※
1校時	○	○	○	○	○
2校時	○	○	○	○	○
3校時	○	○	○	○	○
4校時	○	○	○	○	○外国語 (英語)
	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み
モジュール	※外国語(英語)	※	※外国語(英語)	※外国語(英語)	※
5校時	○	○	○	○	○
6校時	○	○外国語 (英語)	○	○	○

○:各教科等(45分) ※:モジュール(15分)

・標準授業時数には含まれないが、児童会活動やクラブ活動について、年間、学期ごと、月ごとなどに
適切な授業時数を充てるものとされている。

・モジュールでは、聞き取りや発音の練習など、45分授業(週2コマ)で学んだ表現等を反復により定着
させるための活動が適している。

学習者が必要とするものの特殊性、学習者の性質、また資質と連動したモジュール、あ
るいはそのモジュールの束が重要な意味を持つてくる(引用文献7 CEFR, p. 7)。

注7)「奈良の学習法」という教育実践の取り組みはすでに103年の歴史があり、大正自由
教育の実践者、『学習原論』を著した木下竹次の教育理念に翻る。詳細は、機関誌『学習
研究』に実践事例、『わが校百年の教育』に奈良女子高等師範学校に付設された学校とし
て誕生した大正から現在に至る「子どもを中心にした学習追究」の道筋の記述、等々が
ある。

注8) 奈良女子大学附属小学校における英語教育の実践例は、尾上利美:「英語を通して日
本語を知る外国語活動:奈良女子大学附属小学校における実践を例に」、『人間形成と
文化:奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報』, 第7号, pp. 243-252 (2009) に詳
しい。

注9) 一貫性、すなわち「一貫性を持つ」とはCEFRの満たすべき基準の一つで、全体とし
ては「包括的(comprehensive)」「明晰性(transparent)」「一貫性(coherent)」として、さ
らに、言語教育と学習のためのこの基準に照らしての枠組作成は、決して、「単一の均一
的システムをめざすものではない」とする。(引用文献7 CEFR, pp. 7-8)

注10) ヴィゴツキーは、生活的概念と科学的概念の対比の中で、外国語の習得と母語の発
達について、自覚と意図、双務的相互的依存関係を述べる。¹⁵⁾

注11) この本を題材に用いたTVプログラムがある。デンマークのみではなくカナダのCBC

放送の長く親しまれた子ども向け番組“Friendly Giant”(1958-1985)の1981年作品に、“Friendly Giant-Danish Nursery Rhymes”がある。このなかで本作品が Friendly Giant によって読まれる。ほのぼのとしたキャラクターたちとハーブやリコーダの音色が馴染んで優しい作りの作品になっている(心地よさと関連して)。You-tube; Friendly Giant -Danish Nursery Rhymes 1981-

注12) ボルノーは、「すべての単語は任意に選ばれた音声記号なのではなくて、響きをもった姿として一定の感情のニュアンス、つまり一定の表現性格をもち、その語によって表現されるものの理解に作用」¹⁶⁾すると。響きの感覚をつかむことは、語と語のつながりの関係(co-location)の把握の上においても、以後重要になってくる。

注13) 同じ歌の英語歌唱を授業の始まりに毎回取りあげているクラスがある。「心地よさ」とは重要なキーワードになろう。元副校長、現奈良女子大学特任教授梶田氏の子どもの心理を掴んだ言、「子どもたちは心地よいものは離さない」に端的に表現されているように、外国語の学習にも気持ち、心は大切である。

注14) 今回の稿では取り扱わないが、言語能力記述文を参考にした到達目標をおくだけでは充分ではなく、ランゲージ・ポートフォリオ(ELP)の効果的な指導と自己評価への利用がある。

注15) ブルーナーの用語では「ラセン形教育過程(spiral curriculum)」¹⁷⁾という、それぞれの子どもの発達段階に見合った形での累積的な学習を意味する。また、仮説「どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階の子どもにも効果的に教えることができる」¹⁷⁾という観点で教材を活用している。

注16) Eric Carle: *The Hungry Caterpillar*, Hummish Hamilton, (1969)

注17) Emma Chrichester Clark: Merry Christmas, *Blue Kangaroo!*, Harper Collins Children's Books, (2006)

注18) 原本は英国でも貴重な絵本で、オックスフォード大学Bodleian LibraryのRare Books Listに挙げられている“The Opie Collection”である。Leslie Brooke: *The Opie Collection The World of Mother Goose Part II, Orange and Lemons* (1995), 『復刻マザーグースの世界』, ほるぷ出版(1996)

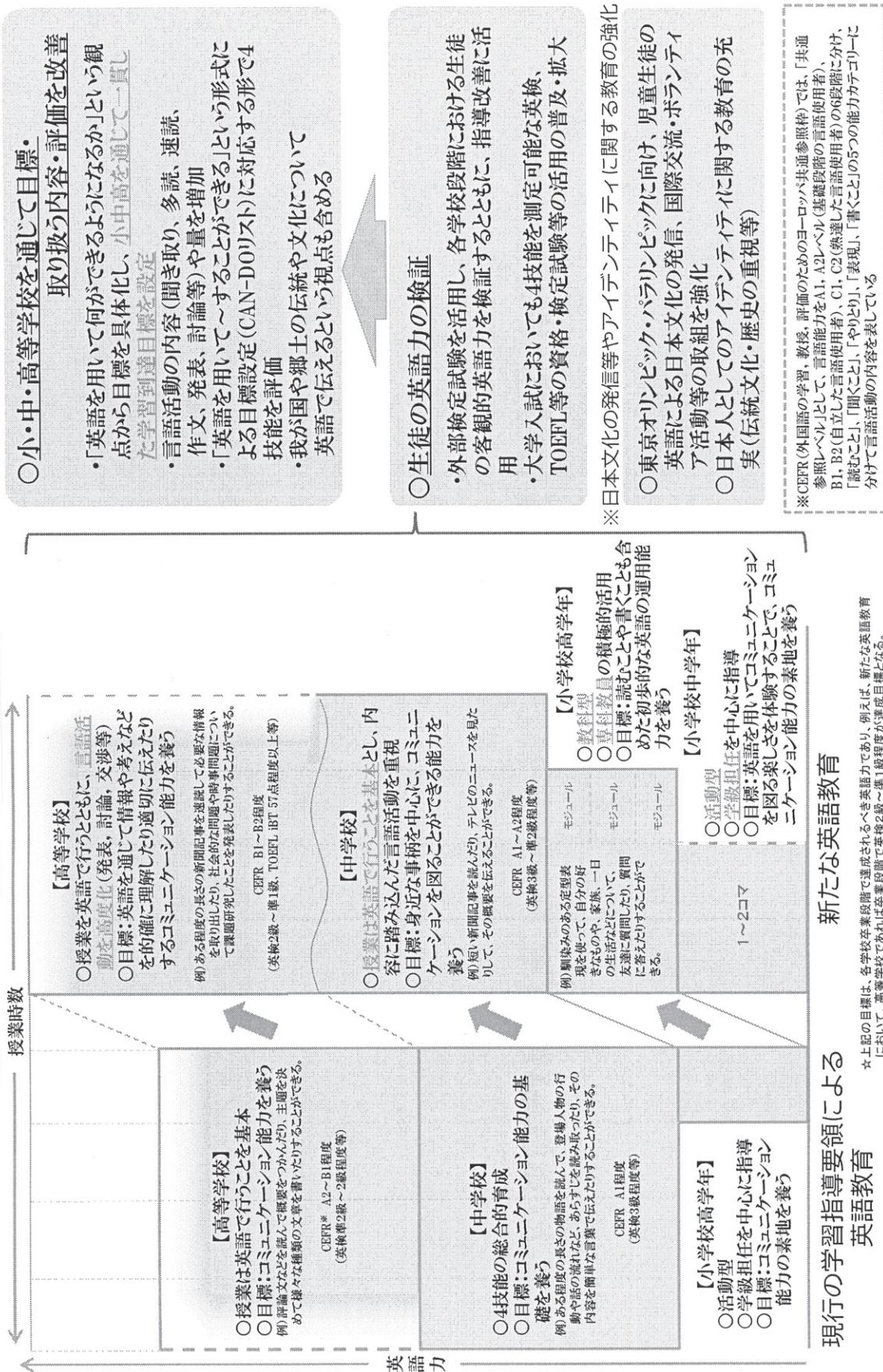
注19) 注釈7を参照されたい。

注20) 例えば、言語化、言語表現に関わっては、「自律的に学ぶ子どもを育てる学習法」を主題に「日記の表現」論を取り上げる、梶田萬理子、日和佐尚、谷岡義高の論考がある¹⁹⁾。同校の長く継承され、発展させられてきた実践の力は大きい。それらのことを外国語教育の括りでいえば、母語言語能力ならびに、「知的組織力(cognitive organisation)」(引用文献7 CEFR, p. 13)との関係が暗に示されているといえるのではなかろうか。

引用文献・参考文献

- 1) 教育再生実行本部：「英語教育の抜本的改革」, 『成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言』, <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai6/siryou5.pdf> (2014.1 アクセス)
- 2) 文部科学省：「グローバル化に対応した英語教育会実施計画」, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm (2014.1.14 アクセス)
- 3) 投野由紀夫：『英語到達度指標 CEFR-J : ガイドブック』, 大修館, p. 34 (2013)
- 4) 文部科学省：「小学校学習指導要領」, 東京書籍, pp. 107-109 (2008)
- 5) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 外国語活動篇」, 東洋館出版社, p. 34 (2008)
- 6) John Trim, Brian North, Daniel Coste 原著：吉島茂, 大橋理枝, 奥総一郎, 松山明子訳・編：『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠(外国語教育2)』, 初版第2刷, 朝日出版, pp. 27-33 (2008) (本文中の引用はCEFRと略す)
- 7) 岡本夏木：『子どもとことば(岩波新書黄版179)』, 岩波新書, pp. 129-159 (1982)
- 8) Eric Kane, Christine Graf: *Think read write 1*, ELF Learning, p. 6 (2013)

- 9) EnchantedLearning.com:「クリスマス語彙リスト」, <http://www.enchantedlearning.com/wordlist/christmas.shtml> (2013. 12. 5 アクセス)
- 10) N. M. Bodecker : Danish Nursery Rhymes : *It's Raining Said John Twainig*, Macmillan (1973)
- 11) キャンベル久美子:「グローバリゼーションのなかの語学教育: 文化的多様性と人権尊重の地平」, 『奈良佐保短期大学紀要』, 20, pp. 65-74 (2013)
- 12) John Trim, Brian North, Daniel Coste 原著: 吉島茂, 大橋理枝, 奥総一郎, 松山明子訳・編: 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (外国語教育 2)』, 初版第 2 刷, 朝日出版, pp. 4-5 (2008)
- 13) 文部科学省初等中等教育局: 『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標設定の手引き』, http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaiko_kugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf (2014. 1. 19 アクセス)
- 14) O. F. ボルノー著, 浜田正秀他訳: 『新しい教育と哲学: ボルノー講演集』, 玉川大学出版部, p. 200 (1968)
- 15) ヴィゴツキー著, 柴田義松, 森岡修一訳: 『子どもの知的発達と教授』, 明治図書, pp. 147-148 (1975)
- 16) O. F. ボルノー著, 浜田正秀他訳: 『新しい教育と哲学: ボルノー講演集』, 玉川大学出版部, p. 206 (1968)
- 17) Jerome Bruner, *The Process of Education*, pp. 52-54, Harvard Univ. Press, (1960)
鈴木祥蔵, 佐藤三郎訳: 『教育の過程』 岩波書店, pp. 66-69 (1963)
- 18) Jerome Bruner: *The Process of Education*, Harvard Univ. Press, p. 33 (1960)
鈴木祥蔵, 佐藤三郎訳: 『教育の過程』 岩波書店, p. 42 (1963)
- 19) 学習研究会編: 『学習研究』 455, 学習研究会, pp. 6-29 (2012)
- 20) 岡本夏木: 「ことばと人間形成」, 『ことばと教育 (岩波講座教育の方法 4)』, 岩波書店, pp. 2-21 (1987)
- 21) Language Policy Division, Strasbourg: Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR) A Manual, p. 32 (2009), http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/ManualRevision-proofread-FINAL_en.pdf (2014. 1. 30)
- 22) ヴィゴツキー著, 柴田義松訳: 『思考と言語』, 新読書社, pp. 112-115 (2001)
- 23) Ernst Cassirer: *An Essay on Man—an introduction to a philosophy of human culture*, Yale Univ. Press, Chap. VIII (1944) (宮城音弥訳: 『人間-シンボルを操るもの-』, 岩波書店, p. 258 (1953))
- 24) キャンベル久美子: 口頭発表「小学校における外国語活動の展開—実践をふりかえって—」, 第 65 回関西教育学会 (2013)
- 25) ニック・キャンベル著, 杉藤美代子編: 『音声文法』, くろしお出版 (2011)
- 26) 杉藤美代子: 「日本語と英語のアクセントとイントネーション」, 『日本語の音声・音韻 (下) (講座日本語と日本語教育)』, 和泉書院, pp. 349-378 (1990)
- 27) 杉藤美代子: 「英語と教育」, 『日本人の英語 (日本語音声の研究 2)』, 泉書院, pp. 265-331 (1996)
- 28) 波多野完治著: 『子どもの認識と感情 (岩波新書, 青-939)』 岩波新書 (1975)
- 29) 波多野完治編: 『ピアジェの発達心理学』 新装版, 国土社 (1993)
- 30) O. F. ボルノー著, 浜田正秀訳: 『哲学的教育学入門』, 玉川出版 (1973)
- 31) O. F. ボルノー著, 浜田正秀訳: 『人間学的に見た教育学 (世界教育宝典 25)』 改訂 2 版, 玉川出版, pp. 138-141 (1987)
- 32) 松井春満, 松井春満編: 『生きる力を培う教育』 学術図書出版 (1992)
- 33) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程センター編: 『小学校外国語活動における評価方法等の工夫改善のための参考資料』, 教育出版 (2011)



○小・中・高等学校を通じて目標・
 取り扱う内容・評価を改善

- 「英語を用いて何ができるようになるか」という観点から目標を具体化し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定
- 言語活動の内容(聞き取り、多読、速読、作文、発表、討論等)や量を増加
- 「英語を用いて~することができるとい形式による目標設定(CAN-DOリスト)に対応する形で4技能を評価
- 我が国や郷土の伝統や文化について英語で伝えるという視点も含める

○生徒の英語力の検証

- 外部検定試験を活用し、各学校段階における生徒の客観的英語力を検証するとともに、指導改善に活用
- 大学入試においても4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格・検定試験等の活用の普及・拡大

※日本文化の発信等やアイデンティティに関する教育の強化

- 東京オリンピック・パラリンピックに向け、児童生徒の英語による日本文化の発信、国際交流・ボランティア活動等の取組を強化
- 日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実(伝統文化・歴史の重視等)

※CEFR(外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠)では、「共通参照レベル」として、言語能力をA1、A2レベル(基礎段階の言語使用者)、B1、B2(自立した言語使用者)、C1、C2(熟達した言語使用者)の6段階に分け、「読むこと」、「聞くこと」、「やりとり」、「表現」、「書くこと」の5つの能力カテゴリーに分けて言語活動の内容を表している

付図1 グローバル化に対応した新たな英語教育の目標・内容等(案)²⁾

付表1 CEFR のレベル⁶⁾

基礎段階の言語使用者	A1	<p>具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。</p> <p>自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問したり、答えたりできる。</p> <p>もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。</p>
	A2	<p>ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。</p> <p>簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。</p> <p>自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。</p>
自律した言語使用者	B1	<p>仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。</p> <p>その言葉が話されている地域を旅行しているときに起りそうな、たいていの事態に対処することができる。</p> <p>身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。</p> <p>経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べるすることができる。</p>
	B2	<p>自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。</p> <p>お互いに緊張しないで母語話者とやり取りできるくらい流暢かつ自然である。</p> <p>かなり広範な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。</p>
熟達した言語使用者	C1	<p>いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。</p> <p>言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。</p> <p>社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも、効果的な言葉遣いができる。</p> <p>複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する軸や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。</p>
	C2	<p>聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。</p> <p>いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。</p>

付表2 CEFR-J Can do Descriptor Database のサンプル (A 1レベル: やりとり)³⁾

レベル	オリジナルのディスクリプタ	日本語 (一般)	日本語 (小学生以下用)
A 1	I can say who I am, ask someone's name and introduce someone.	自分が誰であるか言うことができ、相手の名前を尋ねたり、相手のことを紹介したりすることができる。	自分の名前を言ったり、相手の名前を聞いたり、相手の名前を紹介ができる。
A 1	I can ask and answer simple questions, initiate and respond to simple statements in the area of immediate need or on very familiar topics.	簡単な質問をしたり、簡単な質問に答えることができる。また必要性の高いことや身近な話題について発言したり、反応したりすることができる。	簡単な質問をしたり、簡単な質問にこたえることができる。また身近なことについて質問したり、質問に答えることができる。

付表3 CEFRの例示的尺度²¹⁾

Table 4.2: コミュニケーション言語能力のAspect								
	受容的活動		やりとり		産出的活動		調停活動	
	聞く こと	読む こと	発話 やりとり	書く やりとり	発話 産出	書く 産出	発話 調停	文書 調停
①言語構造的な能力								
一般の範囲	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
語彙領域	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
語彙制御			✓	✓	✓	✓	✓	✓
文法的正確さ			✓	✓	✓	✓	✓	✓
音声制御			✓		✓		✓	
正書法				✓		✓		✓
②社会言語能力								
社会言語適切さ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
③言語運用能力								
柔軟性			✓	✓			✓	✓
発話権の取得			✓					
話題の展開	✓	✓		✓	✓	✓	✓	✓
脈絡・一貫性	✓	✓			✓	✓	✓	✓
流暢さ			✓		✓		✓	
命題の正確さ	✓	✓			✓	✓	✓	✓
④コミュニケーション方略								
要点把握/推測	✓	✓					✓	✓
発話権の取り方			✓					
協調性			✓	✓				
説明を求める			✓	✓				
計画					✓	✓		✓
補償			✓	✓	✓	✓	✓	✓
モニタリングと修正			✓	✓	✓	✓	✓	✓

訳は筆者による。『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（外国語教育Ⅱ）』⁶⁾では、mediationは「仲介」と訳され、翻訳や通訳、要約または記録の形であたえるものとされているが、ここでは交渉、交流を成立させるという意味で「調停」と筆者は訳した。また、本文中では、受容的活動は理解すること、産出的活動は表現としている。